

ネギ栽培において注意する病害

ネギは乾燥に比較的強いですが、土壌の水分過多には弱い作物です。特に高温と過湿が重なると軟腐病などの病害が急に広がる可能性がありますので注意しましょう。

・軟腐病

症状

葉身の展開部に水浸状の病斑を生じ、やがて内部が腐敗して、外葉から軟化、腐敗して枯死する。地下部に発生した場合は茎盤基部の一部がやや褐変して、生育不良となる。いずれの場合も特有の悪臭を放ちます。



原因

細菌による土壌伝染により病気にかかります。この病原菌はネギのほかにもハクサイ・ダイコン・キャベツなどのあぶらな科、ジャガイモ・ナスなどナス科・ニラなどのユリ科作物をはじめとして多岐の野菜に感染します。

ネギが栽培されると根の周りや葉面上で増殖し、農作業や害虫などによってできた傷口などから侵入します。侵入した菌は灌水や雨によって病斑部分から周囲に飛散して伝染・蔓延していくことになります。

出やすい条件

夏季の長雨、台風などの集中豪雨や雨を伴う強風、気温が高い年の初秋の長雨だと、高温・多湿条件で発生が多くなります。特に低湿地や水田転作畑は滞水しやすく被害が大きくなりやすいです。

また、強風や虫害などで傷がついた場合や、萎凋病などほかの病気に侵されている場合、病原菌が侵入しやすくなる為発生が助長されます。

防ぐには？

軟腐病は土壌伝染する病気ですので、多発する圃場ではあらかじめ土壌消毒をすることをお勧めします。

畑が灌水・多湿条件になった場合は根腐れを起こし、軟腐病にかかりやすくなりますので速やかに排水をしてください。また発病株は次の伝染源になりますので、周囲の株と一緒に抜き取り、圃場の外に持ち出します。

薬剤での防除は発生してからでは難しいので、予防中心の防除を行いましょう。

薬剤例 オリゼメート粒剤 スターナ水和剤 カスミンボルドー など

・白絹病

症状

株元の地際付近に発生し、葉鞘や周辺の地表面に白色の絹糸状の菌糸を生じ、その後この菌糸上に淡褐色の球形の菌核(十タネ状の菌核)を作ります。病気が進行してくると被害を受けた部分は褐変腐敗して、下葉から黄化、しおれ、枯れあがる、萎縮するなどの症状が出ます。



原因

土壤中に生息するカビが原因でおこる病気です。この病原菌はネギのほかに、トマト、ナス、ピーマン、キュウリ、ウリ、メロン、スイカ、カボチャ、タマネギ、ニンジンなど多くの作物に感染します。

出やすい条件

夏季の高温・多湿条件で発生が助長され、土壌湿度が高いと多発します。特に乾燥状態から過湿状態が続くと増え、排水不良の圃場でも増えやすいです。

土壌中の菌は5月ごろから徐々に発芽し、近隣のネギに感染し、6月の中旬ごろから病気の発生が見られるようになります。蔓延するのは梅雨の末期から8月下旬ごろに最も進行し、11月に入ると終息してきます。

防ぐには？

白絹病の菌は水に弱いので20日以上湛水すると死滅します。

高温・過湿条件で発生が増えますので、排水の悪い圃場では排水対策を行きましょう。

生のワラ等、未熟有機物の施用は病原菌を増殖させる原因となる場合がありますので、使用する場合は定植の1ヶ月前には施用を済ませ、よく腐熟させてください。

発病株は、次の伝染源になりますので、抜き取り、圃場の外に持ち出しましょう。

薬剤例 アフェットフロアフル バリダシン液剤5 モンカットフロアフルなど

ネギ栽培において特に注意する病気

黒腐菌核病

症状

発病すると、まず、葉先から灰白色に枯れこみ生育が遅延します、初期の症状は根や地際部分がアメ色に腐敗し、白色のカビが生じます。その後症状が進むと、地際部が黒く腐敗します。特徴的なのは病斑部に菌核が形成され、黒色のかさぶた状になるのが大きな特徴です。



原因

土壌中のカビの一種により引き起こされる病害です。ネギのほか、タマネギ、ワケネギ、ニラ、ラッキョウ、ニンニクなどに感染します。発病株で形成された菌核が次の感染源となります。



出やすい条件

病原菌の生育適温は 15～20℃で低温を好む為、気温が 10℃前後となる 12 月以降に症状が拡大します。また、酸性土壌で多発しやすい傾向があります。ですので、冬を越す作型の秋冬どり、春どりでは注意が必要です。

防ぐには？

多発後の効果的な対策が無く、単一の防除対策では確実な防除が難しいため過去に黒腐菌核病がでた圃場では、耕種的防除や土壌消毒、生育中の薬剤防除を組み合わせ計画的に防除する必要があります。

酸性が強く、排水が悪い圃場で連作をすると発生を助長しますので、排水対策を徹底するとともに、石灰などで土壌酸度の矯正をはかれます。

発病した株は、菌核が次の伝染源になりますので、できれば菌核ができる前に圃場の外に持ち出し、土中深くに埋めるなどします。また、使用した農機具に菌核が付着しているとほかの圃場に広める原因にもなりますので、洗浄をしましょう。

薬剤での防除を行う場合は、病原菌の生育温度に合わせた農薬の防除を行いましょう。

登録のある薬剤

アフェットフロアブル(予) セイビアーフロアブル(予)パレード 20フロアブル(治) モンガリット粒剤(治)などに登録があります。モンガリット粒剤は冬季に定植する作型では、生育が抑制されることがあるので注意してください。土壌消毒剤ではバスアミド微粒剤などが利用できます。

本病に対する農薬散布の考え方

低温を好み、2～3月に被害が多くなる病気ですので、気温が下がる時期から防除を開始して、菌の生育温度に合わせて農薬の散布を行います。

作型	9月	10月	11月	11月	12月	1月	2月	3月
秋冬どり	1回目	2回目						
春どり	1回目	2回目					3回目	

- ① 平均気温が 20℃を下回る 9 月下旬から 10 月上旬が農薬散布の 1 回目の目安。
- ② 2 回目は 1 回目から約 1 カ月が目安。
- ③ 平均気温が 5℃を上回る 2 月下旬が農薬散布 3 回目の目安。